

シンポジウム 2 座長集約

「マルチモダリティシーンが躍進する救急医療における問題点とその取り組み」

国立病院機構仙台西多賀病院 放射線科 高橋 大樹
石巻赤十字病院 及川 林

【座長集約】

従来型の救急医療は、Primary Surveyでの一般撮影からSecondary SurveyでのCT、そして根本治療としてのIVRなどマルチなモダリティが系統的にその役割を担うものだった。近年、ハイブリッドERと呼ばれる血管撮影装置とCT装置が同じ救急初療室に配置されて診断(CT)から治療(IVR or 外科的手術)までを、患者を移動させることなく迅速に行える先進的なシステムが広がっている。

今シンポジウムでは、東北を代表する救急医療施設から3名のシンポジストを招き、各施設での救急診療における放射線技師の役割、他職種連携の現状、課題と対策に関して講演していただいた。また、討論は特別講演の大阪急性期総合医療センター 中 智章先生も参加していただいた。八戸市立市民病院 竹洞 潤希先生の講演では、八戸市立市民病院は従来型救急医療施設であり、救急初療室とCT室が離れているため移動に伴うリスクが付き纏う環境だが、患者観察を慎重に行い患者安全を確保しているとのことだった。近年は、状態が不安定でも積極的にCT撮影する施設が増加している。患者の異変、バイタルサインの変化など患者状態の変化にいち早く気づけるテクニックは必須である。山形県立中央病院 荒木 隆博先生の講演では、救急診療においては撮影技術などのテクニカルスキルだけでなく、コミュニケーション技術や気づきのスキルなどのノンテクニカルスキルの習得も放射線技師に求められているとのことだった。チームが最高のパフォーマンスを発揮するためには、チーム内の良好なコミュニケーションは必須である。ハイブリッドER施設である東北大学病院からは小野勝範先生にハイブリッドERでの他職種連携の現状、放射線技師の役割、課題とその取り組みを講演していただいた。ハイブリッドERでは、多職種が同じ時間軸で協働しているため、これまで以上に職種間の連携が重要になってきているとのことだった。特別講演は、世界で最初にハイブリッドERを導入して8年間運用している大阪急性期総合医療センター 中 智章先生からハイブリッドERの実績、放射線技師の役割などについて講演していただいた。患者移動の無いハイブリッドERでの重症患者対応は、診断、処置の迅速化により救命率が向上しているとの報告をしていただいた。診断と処置が直結するハイブリッド ERでは治療ストラテジーの共通認識をスタッフ全員が持たなければ重症患者対応はできないため、スタッフの継続的な教育が重要とのことだった。

施設特徴の異なる3名の演者によるシンポジウムと特別講演だったが、どの施設でも他職種連携を強く意識してより良い救急診療を目指していた。救急診療は、緊急度・重症度の高い重症患者を時間的制約がある中、限られたスタッフで対応しなければいけない。他職種連携の重要性が高いのは間違いなく、そのパフォーマンスが患者の生死に直結する。高いパフォーマンスを発揮するには、他職種業務を理解してお互い助け合える関係を築かなければいけない。他職種業務を理解することにより新たな「目」を持ち、その「目」で新たな気づきスキルを養っていただきたい。診療放射線技師が救急診療を支えているとの気概を持ち、医師、他のメディカルスタッフと協調して地域の救急医療の発展に大いに貢献してほしい。